

花音♪

平成27年8月15日 靖国神社

持ち帰り厳禁！

皆で利用する歌詞カードです、持ち帰らないで下さい

【目次】

p1. ああ ^{くれない} 紅 ^ち の血 ^も は燃ゆる

p2. ^{あいこくこうしんきょく} 愛国行進曲

p3. ^{あいばしんぐんか} 愛馬進軍歌

p4. ^{あかつき} 暁 ^{いのる} に祈る

p5. ^{あらわし} 荒鷲 ^{うた} の歌

p6. ^{うみ ゆ} 海行かば

p7. ^か 加藤 ^は 隼 ^は 戦闘 ^{とうたい} 隊

p8. ^{きげん} 紀元 ^に せんろ ^つ びやく ^{ねん} 六百年

p9. ^{きみ} 君 ^よ が代

p10. ^{ぐんかんこうしんきょく} 軍艦行進曲

p11. ^{げつげつ} 月月 ^か すい ^き きん ^{きん} 水木金金

p12. ^{ごうちん} 轟沈

p13. ^{しゅっせい} 出征 ^{へい} 兵士 ^を おく ^{うた} 送る歌

p14. ^{しょうわいしん} 昭和維新 ^{うた} の歌 (青年日本の歌)

p16. ^{せんゆう} 戦友

p18. ^{そら} 空 ^{しんべい} の神兵

p19. ^{たいへいようこうしんきょく} 太平洋行進曲

p20. ^{ちち} 父 ^よ あなた ^は 強 ^{つよ} かった

p21. ^{てき} 敵 ^{いく} まん ^{ばん} 幾万

p22. ^{どうき} 同期 ^{さくら} の桜

p23. ^に ほん ^{りく} ぐん ^{ぐん} 日本陸軍

p25. ^{ぼつとうたい} 抜刀隊 ^{うた} の歌

p27. ^ひ 日 ^{まる} ころ ^{しんきょく} 丸行進曲

p28. ^{へいたい} 兵隊 ^{さん} よ ^あ り ^が とう ^う

p29. ^{ほたる} 蛍 ^{ひかり} の光

p30. ^ほ へい ^{ほんりょう} 歩兵の本領

p31. ^{むぎ} 麦 ^{へいたい} と兵隊

p32. ^{ゆき} 雪 ^{しんぐん} の進軍

p33. ^ら バウル ^{かいぐんこうくうたい} 海軍航空隊

p34. ^ら バウル ^{こうた} 小唄

p35. ^{ろえい} 露営 ^{うた} の歌

p36. ^{わか} わし ^{うた} 若鷲の歌

ああ紅くれないの血ちは燃もゆる

花もつぼみの 若桜

五尺の生命 ひっさげて

国の大事に 殉ずるは

我ら学徒の 面目ぞ

ああ紅の血は燃ゆる

ああ紅の血は燃ゆる

後につづけと 兄の声

今こそ筆ふでを なげうちて

勝利ゆるがぬ 生産に

勇み立ちたる 兵つわものぞ

ああ紅の 血は燃ゆる

君は鋏くわとれ 我は鎚つち

戦う道に 二つなし

国の使命を とぐるこそ

我ら学徒の本分ぞ

ああ紅の血は燃ゆる

何を荒すさぶか 小夜嵐さよ

神州男児 ここに在あり

決意ひとたび 火となりて

護る国土は 鉄壁ぞ

ああ紅の血は燃ゆる

ああ紅の血は燃ゆる

愛国行進曲 あいこくこうしんきょく

見よ 東海の空明けて

旭日 高く輝けば

天地の正気 澆刺と はつらつ

希望は躍る 大八洲 おおやしま

おお 清朗の朝雲に

聳ゆる富士の 姿こそ そび

金おう無欠揺るぎなき

わが日本の 誇りなれ

起て 一系の大君を

光と 永久にいただきて

臣民われら皆共に

御稜威に副わん 大使命 みいつそ

征け 八紘を宇となし いえ

四海の人を 導きて

正しき平和 うち建てん

理想は花と咲き薫る かお

いま幾度か わが上に

試練の嵐 たけるとも

断乎と守れ だんこ その正義

進まん道は一つのみ

ああ 悠遠の神代より

轟く歩調 うけ継ぎて

大行進の ゆく彼方

皇国常に 栄あれ

あいばしんぐんか
愛馬進軍歌

国をでてから 幾月ぞ
ともに死ぬ気で この馬と
攻めて進んだ 山や河
とつた手綱たづなに 血が通う

昨日おと陥した トーチ力で
今日は仮寝の 高いびき
馬よぐつすり眠れたか
明日の戦は 手強いぞ

弾丸の雨ふる 濁流を
お前頼りに のり切って
任務つとめ果した あの時は
泣いてなぐれ 秣まぐれを 食わしたぞ

慰問袋の お守札まもりを
かけて戦う この栗毛
ちりにまみれた 髭面に
なんでなつくか 顔よせて

伊達にはとらぬこの剣
真つ先駆けて突つ込めば
何と脆もろいぞ敵の陣
馬よ いななけ勝鬨かちどきだ
お前の背に日の丸を
立てて入城この凱歌
兵に劣らぬ天晴あっぱれの
勲は永く忘れぬぞ

あかつき いの
暁に祈る

あああの顔で あの声で
手柄頼むと 妻や子が
ちぎれる程に 振った旗
遠い雲間に また浮かぶ

ああ堂々の 輸送船
さらば祖国よ 栄えあれ
遙かに拜む 宮城の
空に誓った この決意

ああ軍服も 髭面も
泥に塗れて 何百里
苦勞を馬と 分け合つて
遂げた戦闘も 幾度か

ああ大君の 御為に
死ぬは兵士の 本分と
笑った戦友の 戦帽に
残る恨みの弾丸の跡

ああ傷ついた この馬と
飲まず喰わずの 日も三日
捧げた生命これまでと
月の光で 走り書き

あああの山も この川も
赤い忠義の 血がにじむ
故郷まで届け暁に
あげる興亜の この凱歌

あらわし
荒鷺の歌 うた

見たか銀翼 この勇姿

日本男子が 精こめて

作って育てた 我が愛機

空の護りは引受けた

来るなら来てみる 赤トンボ

ブンブン荒鷺 ブンと飛ぶぞ

誰がつけたか 荒鷺の

名にも恥じない この力

霧も嵐も なんのその

重い爆弾 かかえ込み

南京ぐらいは ひとまたぎ

ブンブン荒鷺 ブンと飛ぶぞ

金波銀波の 海越えて

曇らぬ月こそ わが心

正義の日本知ったかと

今宵また飛ぶ 荒鷺よ

御苦勞 しつかり頼んだぜ

ブンブン荒鷺 ブンと飛ぶぞ

翼に日の丸乗組は

大和魂の 持主だ

敵機は あらまし潰したが

あるなら出てこい お代り来い

プロペラばかりか 腕も鳴る^な

ブンブン荒鷺 ブンと飛ぶぞ

うみゆ
海行かば

海行かば

水漬くかばね

山行かば

草むすかばね

大君の

辺にこそ死なめ

かえり
顧みはせじ

海行かば

水漬くかばね

山行かば

草むすかばね

大君の

辺にこそ死なめ

かえり
顧みはせじ

加藤隼戦闘隊

かとう はやぶさ せんとうたい

エンジンの音 轟々と

轟々と

隼は征く 雲の果て

翼に輝く 日の丸と

胸に描きし 赤鷺の

印は我等が 戦闘機

寒風酷暑 ものかはと

艱難辛苦 打ち耐えて

整備に当たる 強兵が

しっかりとやって 来てくれと

愛機に祈る 親ごころ

過ぎし幾多の 空中戦

銃弾うなるその中で

必ず勝つの信念と

死なば共にと 団結の

心で握る 操縦桿

干戈交ゆる 幾星霜

七度重なる 感状の

勲の陰に 涙あり

ああ今は亡き 武士の

笑って散った その心

世界に誇る 荒鷺の

翼伸ばせし 幾千里

輝く伝統 受け継ぎて

新たに興す 大亜細亜

我等は皇軍 戦闘隊

紀元二千六百年きげんにせんろつびやくねん

金きんし輝く 日本にっぽんの

栄はえある光 身にうけて

今こそ祝えこの朝あした

紀元は二千六百年 ああ

一億の胸は鳴る

歡喜あふるる この土を

しつかと我等 踏みしめて

はるかに仰ぐ 大御言おおみこと

紀元は二千六百年

ああ 肇国ちよこくの雲青し

荒ぶ世界すさぶにただ一つ

ゆるがぬ御代に 生い立ちし

感謝は清き 火と燃えて

紀元は二千六百年

ああ 報国の血は勇む

潮ゆたけき 海原うしおに

桜と富士の 影織りて

世紀の文化また新た

紀元は二千六百年

ああ 燦爛さんらんのこの国威

正義凜たる旗の下

明朗亜細亜 打ち建てん

力と意気を 示せ今

紀元は二千六百年

ああ 弥栄いやさかの日は昇る

君が代

君が代は

千代に八千代に

さざれ石の

いわおとなりて

こけのむすまで

ぐんかんこうしんきょく

軍艦行進曲

守るも攻むるも黒鉄くろがねの
浮べる城ぞ頼みなる

浮べるその城日の本の
皇国みくにの四方よもを守るべし
真鉄まがねのその艦日ふねの本に
仇なす国を攻めよかし

石炭いわきの煙は大洋わだつみの
龍たつかとはばかり靡なびくなり

弾丸撃つひびきは雷いかずちの
声かとはばかりどよむなり
万里の波濤はとらを乗り越えて
皇国の光輝やかせ

げつげつかすいもくきんきん
月月火水木金

朝だ夜明けだ 潮の息吹き
うんと吸い込む あかがね色の
胸に若さのみなざる誇り
海の男の艦隊勤務

月月火水木金

赤い太陽に流れる汗を

拭いてにつこり 大砲手入れ

太平洋の波波 波に

海の男だ艦隊勤務

月月火水木金

度胸ひとつに 火のような練磨

旗は鳴る鳴る ラツパは響く

行くぞ日の丸 日本ふねの艦だ

海の男の艦隊勤務

月月火水木金

どんとぶつかる 怒濤の唄に
揺れる釣床今宵の夢は
明日の戦さの この腕だめし
海の男だ艦隊勤務
月月火水木金

轟ごう
沈ちん

可愛い魚雷と 一緒に積んだ
青いバナナも 黄色く熟れた
男世帯は 気ままなものよ
ひげも生えます
ひげも生えます 不精ひげ

昇る朝日に 十字の星に
想い遙かな緑の基地よ
戦友ともも笑顔で 待つてくれる
故郷くにの便りも
故郷の便りも 待つている

針路西へと波また波の

飛沫しぶききびしい 見張りはつづく

初の獲物にいつの日会える

今日も暮れるか

今日も暮れるか 腕が鳴る

轟沈 轟沈 凱歌があがりや

つもる苦労も 苦労にやならぬ

嬉し涙に 潜望鏡も

曇る夕日の

曇る夕日のインド洋

しゅつせいへいし おく うた
出征兵士を送る歌

我が大君おおきみに 召よされたる
いのち はえ 生命光榮ある 朝あぼらけ
讚たたえて送る 一億の
歓呼は高く 天を衝つく
いざ征ゆけつわもの日本男児

華はなと咲く身の感激を
戎衣じゅういの胸に引きしめて
正義のいくさ 行くところ
誰たか阻はばまんその歩武ほぶを
いざ征ゆけ つわもの 日本男児

かがやく御旗みはた 先立てて
越ゆる勝利の 幾山河
無敵日本の武勲いさおしを
世界に示す 時ぞ いま
いざ征ゆけ つわもの 日本男児

守る銃後に憂いなし
大和魂ゆるぎなき
国の固めに人の和に
大磐石だいばんじゃくのこの備え
いざ征ゆけ つわもの 日本男児

ああ万世の 大君に
水漬き草むす 忠烈の
誓致ちかいたさん 秋とき至る
勇ましいかな この首途かど
いざ征ゆけ つわもの 日本男児

父祖の血汐に 色映ゆる
国の誉の 日の丸を
世紀の空に 燦然さんぜんと
揚げて築けや新亜細亜
いざ征ゆけ つわもの 日本男児

昭和維新の歌

汨羅の渚に波騒ぎ

巫山の雲は乱れ飛ぶ

混濁の世に我れ立てば

義憤に燃えて血潮湧く

権門上に 傲れども

国を憂うる誠なし

財閥富を誇れども

社稷を思う心なし

ああ人栄え国亡ぶ

盲たる民世に踊る

治乱興亡夢に似て

世は一局の碁なりけり

昭和維新の春の空

正義に結ぶ丈夫が

胸裡百万兵足りて

散るや万朶の桜花

古びし死骸乗り越えて

雲漂揺の身は一つ

国を憂いて立つからは

丈夫の歌なからめや

天の怒りか地の声か

そもただならぬ響あり

民永劫の眠りより

醒めよ日本の朝ぼらけ

見よ九天の雲は垂れ

四海の水は雄叫びて

革新の機到りぬと

吹くや日本の夕嵐

ああうらぶれし天地の

迷いの道を人はゆく

栄華を誇る塵の世に

誰が高楼の眺めぞや

功名何ぞ夢の跡

消えざるものはただ誠

人生意気に感じては

成否を誰かあげつらう

やめよ離騷りそうの一悲曲

悲歌慷慨こつがいの日は去りぬ

われらが剣けん今こそは

廓清かくせいの血に躍るかな

戦友 せんゆう

ここは御国を何百里
離れて遠き満洲の
赤い夕日に照らされて
友は野末の石の下

思えば悲し昨日まで
真先かけて突進し
敵を散々懲らしたる
勇士はここに眠れるか

ああ戦の最中に
隣りに居った此の友の
俄かにはたと倒れしを
我はおもわす駈け寄って

軍律きびしい中なれど
これが見捨てて置かりようか
「しっかりせよ」と抱き起し

仮包帯も弾丸の中

折から起る突貫に
友はようよう顔あげて
「お国の為だかまわずに
後れてくれな」と目に涙

あとに心は残れども
残しちやならぬ此の体
「それじゃ行くよ」と別れたが
永の別れとなつたのか

戦すんで日が暮れて
さがしにもどる心では
どうぞ生きて居てくれよ
ものなといえと願うたに

空しく冷えて魂は
くにへ帰ったポケットに
時計ばかりがコチコチと
動いて居るも情なや

思えば去年船出して
お国が見えずなつた時
玄海灘で手を握り
名をなのつたが始めにて

くまなく晴れた月今宵
心しみじみ筆とつて
友の最後をこまごまと
親御へ送る此の手紙

それより後は一本の
煙草も二人わけてのみ
ついた手紙も見せ合うて
身の上ばなしくりかえし

筆の運びはつたないが
行燈のかげで親達の
読まるる心おもいやり
思わずおとす一雫

肩を抱いては口ぐせに
どうせ命はないものよ
死んだら骨を頼むぞと
奮いかわしたる二人仲

思いもよらず我一人
不思議に命ながらえて
赤い夕日の満洲に
友の塚穴掘ろうとは

空そらの神兵しんべい

藍あおより蒼あおき 大空おおぞらに大空おおぞらに

忽たちまち開あく 百干ひゃくかんの

真白ましろき薔薇ばらの 花はな模様

見みよ落下らくか傘かさ 空そらに降り

見みよ落下らくか傘かさ 空そらを征ゆく

見みよ落下らくか傘かさ 空そらを征ゆく

世紀せいきの華はなよ 落下らくか傘かさ落下らくか傘かさ

その純白じゆんぱくに 赤あかき血ちを

捧たもげて悔くいぬ 奇襲きしゆく隊たい

この青空あおぞらも 敵たの空そら

この山河さんかも 敵たの陣じん

この山河さんかも 敵たの陣じん

敵てき撃げき砕さいと 舞まい降ふる舞まい降ふる

まなじり高たかき つわもの

いづくか見みゆる おさな顔かほ

ああ純白じゆんぱくの 花はな負まいて

ああ青雲あおぐもに 花はな負まいて

ああ青雲あおぐもに 花はな負まいて

讚たたえよ空そらの 神兵しんべいを神兵しんべいを

肉弾にくだん粉こなと 砕くだくとも

撃うちてしやまぬ 大和魂やまとだま

わが丈夫ますらおは 天降あまくだる

わが皇軍みかみは 天降あまくだる

わが皇軍みかみは 天降あまくだる

太平洋行進曲たいへいようこうしんきょく

海の民なら男なら

みんな一度は 憧れた

太平洋の 黒潮を

共に勇んで 行ける日が

来たぞ 歓喜の血が燃える

今ぞ 雄々おおしく 大陸に

明るい平和築く時

太平洋を 乗り越えて

希望はてない 海の子の

意気を 世界に示すのだ

仰ぐ 誉ほまれの軍艦旗

みよしに 菊をいただいて

太平洋を 我が海と

風も輝かがやく この朝だ

伸ばせ 皇国の生命線

遠いわれ等の 親たちが

命たを的に 打ち樹たてた

太平洋に 富源ふげんをば

揃そろえて進む 響ひびきこそ

興おこる 亜細亜あしあの雄おたけ叫こびだ

父ちちよあなたつよは強つよかった

父よあなたは強かった

兜も焦す 炎熱を

敵の屍かばねと 共に寝て

泥水すすり 草を噛み

荒れた山河を 幾千里

よくこそ撃つて 下さつた

夫よ あなたは強かった

骨まで凍る 酷寒を

背もとどかぬ クリークに

三日もつかつて いたとやら

十日も食わずに いたとやら

よくこそ勝つて 下さつた

兄よ 弟よありがとう

弾丸も機雷も 濁流も

夜を自に進む 軍艦旗

名も荒鷲の 羽ばたきに

のこる敵機の 影もなし

よくこそ遂げて 下さつた

友よ わが子よ ありがとう

誉れの傷のものがたり

何度聴きいても 目がうるむ

あの日の戦に 散つた子も

今日は九段の 桜花

よくこそ咲いて 下さつた

ああ 御身らの勲こそ

一億民の まごころを

一つに結ぶ 大和魂

いま 大陸の青空に

日の丸高く映はえるとき

泣いて拝がむ 鉄かぶと

てき いくまん
敵は幾万

敵は幾万ありとても

すべて烏合うごうの勢なるぞ

烏合の勢にあらずとも

味方に正しき道理あり

邪じやはそれ正に勝ち難く

直は曲かちぐりにぞ勝栗かちぐりの

堅き心の一徹は

石に矢の立つ例ためしあり

石に立つ矢の例あり

などて怖おそるる事やある

などてたゆとう事やある

旗にな恥じそ進めよや

たおるるまでも進めよや

裂さかるるまでも進めよや

旗にな恥じそ恥じなせそ

などて怖るる事やある

などてたゆとう事やある

風にひらめく連隊旗

記紋しるしは昇あさる朝日子ひこよ

旗は飛び来る弾丸に

破るる程こそ誉なれ

身ひのちは日本つわものの兵士よ

同期の桜どうき さくら

貴様と俺とは同期の桜
同じ兵学校の庭に咲く
咲いた花なら散るのは覚悟
見事散りましよ国のため

なぜに死んだか散ったのか
貴様と俺とは同期の桜
離れ離れに散ろうとも
花の都の靖国神社
春の梢に咲いて会おう

貴様と俺とは同期の桜
同じ兵学校の庭に咲く
血肉分けたる仲ではないが
なぜか気が合うて別れられぬ

貴様と俺とは同期の桜
同じ航空隊の庭に咲く
仰いだ夕焼け南の空に
未だ還らぬ一番機いま

貴様と俺とは同期の桜
同じ航空隊の庭に咲く
あれほど誓ったその日も待たず

にほんりくぐん
日本陸軍

(出陣)

天に代りて不義を討つ
忠勇無双のわが兵は
歡呼かんこの声に送られて
今ぞ出でたつ父母の国
勝たずば生きて還うじと
誓う心の勇ましさ

(斥候)

或いは草に伏し隠れ
或いは水に飛び入りて
万死恐れず敵情を
視察し帰る斥候兵せつこう

肩かかに懸れる一軍の

安危はいかに重からん

(工兵)

道なき方に道をつけ
敵の鉄道うちこぼち

雨と散りくる弾丸を

身にあびながら橋かけて

わが軍渡す工兵の

功劳何にかたとうべき

(砲兵)

鋤取る工兵助けつつ

銃づ取る歩兵助けつつ

敵を沈黙せしめたる

わが軍隊の砲弾は

放つに当らぬ方もなく

その声天地に轟けり

(歩兵)

一斉射撃の銃づ先に

敵の気力をひるませて

鉄条網もものかはと

躍り越えたる塁上に

立てし誉れの日章旗

みなわが歩兵の働きぞ

(騎兵)

撃たれて逃げゆく八方の

敵を追い伏せ追い散らし

全軍残らずうち破る

騎兵の任の重ければ

わが乗る馬を子のごとく

いたわる人もあるぞかし

(輜重兵)

砲工歩騎の兵強く

連戦連捷せしことは

百難おかして輸送する

兵糧輜重のたまものぞ

忘るな一日おくれなば

一日たゆとう兵力を

(衛生隊)

戦地に名誉の負傷して

収容せらるる将卒の

命と頼むは衛生隊

ひとり味方の兵のみか

敵をも隔てぬ同仁の

なさけよ思えば君の恩

(凱旋)

内には至仁の君いまし

外には忠武の兵ありて

わが手に握りし戦捷の

誉は正義のかちどきぞ

謝せよ国民大呼して

我が陸軍の勲功を

(平和)

戦雲東におさまりて

昇る朝日ともるともに

かがやく仁義の名も高く

知らるる亜細亜の日の出国

光めでたく仰がるる

時こそ来ぬれいざ励め

抜刀隊の歌 ばつとうたい うた

吾は官軍我が敵は
天地容れざる朝敵ぞ
敵の大將たる者は
古今無双の英雄で
これに従う兵は つわもの
共に標悍決死の士 ひょうかん
鬼神に恥じぬ勇あるも
天の許さぬ反逆を
起せし者は昔より
栄えし試し有らざるぞ
敵の亡ぶるそれまでは
進めや進め諸共に
玉散る剣 たまちり けん 抜き連れて死する
覚悟で進むべし

その身を護る魂の
皇国の風と武士は みくに ふう もののぶ

維新以来廃れたる いしんこのかたすた
日本刀の今更に にほんとう
また世に出づる身の誉れ ほま
敵も味方も諸共に

刃の下に死すべきに やいば
大和魂あるものの
死すべき時は今なるぞ
人に後れて恥かくな
敵の亡ぶるそれまでは
進めや進め諸共に もろとも
玉散る剣 抜き連れて
死する覚悟で進むべし

剣の光閃くは けんのみく せんくは
雲間に見ゆる稲妻か
四方に打ち出す砲声は よも
天に轟く雷か とんがら いかづち

敵の刃やいばに伏す者や

弾に砕けて玉の緒の

絶えて果敢はかなく失うする身の

屍かばねは積んで山をなし

その血は流れて川をなす

死地に入るのも君のため

敵の亡ぶるそれまでは

進めや進め諸共に

玉散る剣抜き連れて

死する覚悟で進むべし

ひ まるこつしんきまよく
日の丸行進曲

母の背中に小さい手で

振ったあの日の 日の丸の

遠いほのかな 思い出が

胸に燃えたつ 愛国の

血潮のなかに まだ残る

梅に桜に また菊に

いつも掲げた 日の丸の

光仰いだ 故郷くにの家

忠と孝とをその門で

誓って伸びた 健男児

ひとりの姉が 嫁ぐ宵

買ったばかりの 日の丸を

運ぶたんす 箆ひきだしの 抽斗へ

母が納めた感激を

今も思えば 眼がうるむ

去年の秋よ 強兵つわものに

召し出だされて 日の丸を

敵の城頭 高々と

一番乗りにうち立てた

手柄はためく 勝ちいくさ

永久に栄える 日本の

国の章しるしの 日の丸が

光りそそげば 果てもない

地球の上に朝が来る

平和かがやく 朝が来る

へいたい
兵隊さんよありがとう

肩を並べて 兄さんと

きょうも学校へ ゆけるのは

兵隊さんのおかげです

お国のために

お国のために戦った

兵隊さんのおかげです

夕べ楽しい 御飯どき

家内そろって 語るのも

兵隊さんのおかげです

お国のために

お国のために 傷ついた

兵隊さんのおかげです

淋しいけれど 母様と

今日も円まどかに 眠るのも

兵隊さんのおかげです

お国のために

お国のために 戦死した

兵隊さんのおかげです

明日から 支那の友だちと

仲良く暮して ゆけるのも

兵隊さんのおかげです

お国のために

お国のために 尽された

兵隊さんのおかげです

兵隊さんよありがとう

兵隊さんよありがとう

蛍の光

蛍の光 窓の雪

書ふみ読む月日 重ねつつ

いつしか年も すぎの戸を

開けてぞ今朝は 別れ行く

止まるも行くも 限りとて

互かたみに思う 千ちよろず萬の

心の端はしを 一言に

幸さきくと許ばかり 歌うなり

筑紫の極み 陸みちの奥

海山遠く 隔つとも

その眞心まごころは 隔て無く

一つに尽くせ 國の為

千島の奥も 沖繩も

八洲やしまの内うちの 護まもりなり

至いたらん國くにに 勲ことしく

努めよ我が背 恙つつが無く

歩兵の本領

ほへい ほんりよう

萬朶ばんだの桜えりか襟えりの色

花は吉野に嵐吹く

大和男子と生まれなば

散兵線の 花と散れ

尺余の銃は 武器ならず

寸余の剣 何かせん

知らずやここに 二千年

鍛え鍛えし 大和魂やまとだま

軍旗をまもる 武士もののふは

すべてその数 二十萬

八十余ヶ所に たむろして

武装は解かじ 夢にだも

千里東西 波越えて

我に仇なす 国あらば

港を出でん 輸送船

暫ししばしば守れや 海の人

敵地に一步 我れ踏めば

軍の主兵は ここにあり

最後の決は 我が任務

騎兵砲兵 協同ちからせよ

アルプス山を 踏破とつぱせし

歴史は古く 雪白し

奉天戦の 活動はたらきは

日本歩兵の 華と知れ

むぎ へいたい
麦と兵隊

徐州じょしゅう 徐州と 人馬は進む
徐州居よいか 住みよいか
洒落た文句に 振り返りや
お国なま訛りの おけさ節
ひげがほほえむ 麦畠

行けど進めど 麦また麦の
波の探さよ 夜の寒さ
声を殺して 黙々と
影を落して 肅々と
兵は徐州へ 前線へ

友を背にして 道なき道を
行けば戦野は 夜の雨
「すまぬすまぬ」を背中に聞けば
「馬鹿を云うな」とまた進む
兵の歩みの 頼もしさ

腕をたたいて 遙かな空を
仰ぐ眸ひとみに 雲が飛ぶ
遠く祖国を はなれ来て
しみじみ知った 祖国愛
友よ来て見よ あの雲を

ゆき しんぐん
雪の進軍

雪の進軍氷を踏んで

どれが河やら道さえ知れず

馬は倒れる捨ててもおけず

ここは何処ぞ皆敵の国

ままよ大胆 一服やれば

頼み少や 煙草が二本

焼かぬ乾物ひものに半煮なまにえ飯に

なまじ生命のあるそのうちは

堪こたえきれない寒さの焚火たきび

煙いぶいはずだよ生木が燻る

渋すい顔して功名ばなし 嘸

酸すいというのは 梅干一つ

着はのみ着のまま 気楽ふしどな臥所

背はいのう囊枕がいとうに外套がかぶりや

背ぬくの温みで 雲解くけかかる

夜具きびがらの黍殻きびがら シツポリ濡れて

結びかねたる 罷宮のその夢を

月は冷たく顔のそ覗きこむ

命捧げて 出て来た身ゆえ

死ぬる覚悟で 呐喊とつかんすれど

武運 拙つたなく 討死にせねば

義理にからめた 樋兵じゅっぺい真綿まわた

そろりそろりと 頸くびし締めかかる

どうせ生きては 還らぬ積り

ラバウル海軍航空隊

かいぐんこうくうたい

銀翼連ねて 南の前線

ゆるがぬ守りの 海鷲たちが

うみわし

肉弾砕く 敵の主力

栄えあるわれら ラバウル航空隊

数をばたのんで 寄せくる只中

必ず勝つぞと 飛び込む時は

胸にさしたる 基地の花も

にっこり笑う ラバウル航空隊

海軍精神 燃えたつ闘魂

いざ見よ南の 輝く太陽

雲に波に 敵を破り

轟くその名 ラバウル航空隊

沈めた敵艦 墜とした敵機も

忘れて見つめる 夜ふけの星は

我に語る 戦友の御霊

とも

みたま

勲は高し ラバウル航空隊

ラバウル小唄こうた

さらばラバウルよ

また来るまでは

しばし別れの 涙がにじむ

恋しなつかし あの島見れば

椰子やしの葉かげに 十字星

船は出てゆく 港の沖へ

愛しあの娘の うちふるハンカチ

声をしのんで 心で泣いて

両手合せてありがとう

波のしぶきで 眠れぬ夜は

語りあかそよ デッキの上で

星がまたたく あの星見れば

くわえ煙草もほろにがい

赤い夕陽が波間に沈む

果ては何処ぞ 水平線よ

今日も遙々 南洋航路

男船乗り かもめ鳥

流石さすが男と あの娘は言うた

燃ゆる想いを マストにかかげ

ゆれる心は 憧れはるか

今日は赤道 椰子やしの下

ろえい うた
露営の歌

勝つてくるぞと勇ましく
誓つて国を出たからは
手柄立てずに死なりようか
進軍ラツパ聞く度に
瞼まぶたにうかぶ旗の波

土も草木も火と燃える
果てなきこう野踏みわけて
進む日の丸 鉄兜てつがぶと

馬のたてがみ撫でながら
明日の命を誰か知る

弾丸たまもタンクも銃剣も
暫し露営の草枕しばし

夢に出て来た父上に
死んでかえれと励まされ
さめて睨むにらは敵の空

思えば今日の戦いに
朱あけに染つてにつこりと

笑つて死んだ戦友が
天皇陛下万歳と
残した声が忘らりよか

戦闘いくさする身はかねてから
捨てる覚悟でいるものを
鳴いてくれるな草の虫
東洋平和のためならば
なんの命が惜しかろう

若鷺の歌わかわしうた

若い血潮の 予科練の

七つボタンは 桜に錨いかり

今日も飛ぶ飛ぶ 霞ガ浦にや

でっかい希望の 雲が湧わく

燃える元気な 予科練の

腕はくろがね 心は火玉

さつと巣立てば 荒海越えて

ゆくぞ敵陣なぐり込み

仰ぐ先輩 予科練の

手柄間くたび血潮が疼うずく

ぐんと練れ練れ攻撃精神

大和魂にや 敵はない

生命惜しまぬ 予科練の

意気の翼は 勝利の翼

見事轟ごうちん沈 した敵艦を

母へ写真で 送りたい

ああモンテルパの夜は更けて

モンテルパの 夜は更けて

つるる思いに やるせない

遠い故郷 しのびつつ

涙に曇る 月影に

優しい母の 夢を見る

燕はまたも 来たけれど

恋し我が子は いつ帰る

母の心は ひとすじに

南の空へ 飛んでゆく

さだめは悲し 呼子鳥

モンテルパに 朝が来りや

昇る心の 太陽を

胸に抱いて 今日もまた

強く生きよう 倒れまい

日本の土を 踏むまでは